

賑わいを創出する広場空間の形成手法に関する研究

(研究期間：平成26～29年度)



都市研究部 都市施設研究室 室長 新階 寛恭 主任研究官 吉田 純土

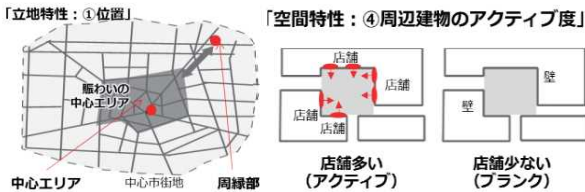
(キーワード) 中心市街地、賑わい、広場空間、質、波及効果

1. はじめに

国総研では、中心市街地等における「広場」が賑わいや交流の核として人々に活用されるよう、広場空間の質の向上を図るための研究を行っている。

広場は、内部の空間構成だけでなく、立地特性や周辺環境等の空間特性により位置づけや利用のされ方も変わる(図1)。そのような広場空間の「質」や周辺波及効果を評価し、効果的な広場空間の形成手法を導くため、複数の広場を対象に広場内の樹木やテーブル等の配置も変更しつつ広場内外の行動を観測し、広場空間と行動との関係性分析を行った。

図1 立地特性や空間特性と広場との関係



2. 実験・観測の概要

第1回目は富山グランドプラザ(半屋外空間)において平日5日間(各6時間)、各日1種類ずつ計5種類の配置パターンで観測し(図2)、(1)トレース(歩行軌跡)、(2)スタティック・ログ(滞留行動)、(3)ゲートカウント(出入口歩行者交通量)を記録した。

第2回目は町田市の「ぼっぼ広場」(屋外空間)において平日休日2日間(各6時間)、第1回目と同様の広場内での観測とあわせて、広場利用者の周辺への立寄り行動等を追跡記録した。

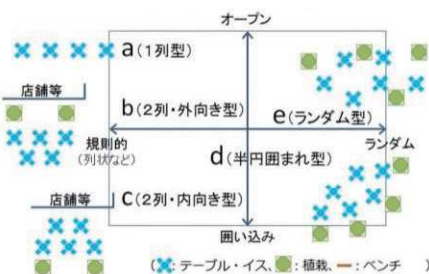


図2 第1回目実験・観測の配置パターン

3. 分析結果

1) 植栽や飲食店等により囲われ感が形成された配置では歩行者滞留が多く発生した、2) 囲われ感が形成された配置では通り抜けが少なくなった、3) 出入口に近い場所では短時間多頻度な利用となり、離れるに従い長時間利用の傾向となった(図3)など、空間構成や周辺環境が空間の使われ方に大きく影響を及ぼすことが分かった¹⁾。また、利用者属性等によって周辺への行動パターンも異なることが観測され、空間特性と波及効果の関係も示唆された。

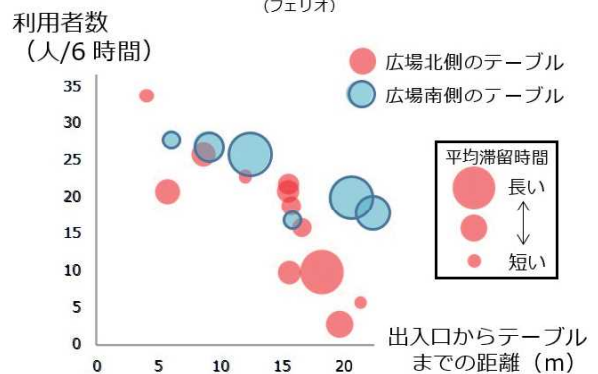
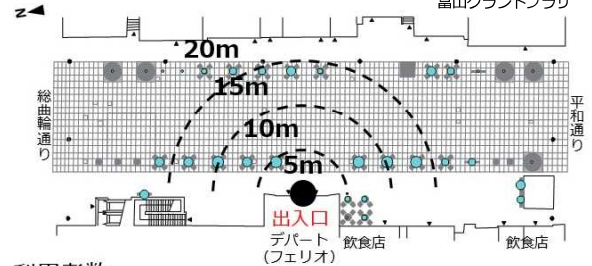


図3 出入口からの距離に伴う利用形態の違い

4. 今後の展開

広場の立地・空間と行動との関係性分析と評価を通じた質の高い広場空間の形成手法とあわせ、そのような広場の方向性に応じた街なかの適切な位置への広場導入方策についても構築に取り組んでいく。

1) 「都市における広場の空間構成からみた歩行者行動の分析 ～広場空間の質の評価に向けて～」, アーバンインフラテクノロジー第28回技術研究発表会, Vol. 28, UIT, 2016. 11